

◆左京七条三坊の調査—第81-1次

1 はじめに

この調査は、橿原市木之本町において宅地造成にともなう事前調査として実施したものである。調査地は香久山の西裾部で、木之本町の集落からは、道路を隔てて東に位置する。調査区は、1985～1987年の第46・47・50・53次調査（『藤原概報16～18』）で検出されたSF4300、SD4301・4302、SA4282等の東三坊坊間路に関連する遺構の南延長上にあたり、それらの検出を調査の主たる目的とした。調査面積は428㎡である。

2 遺構

基本層序は、上から耕土、床土、黄褐色土(地山)、暗褐色砂質土(地山)である。後述する井戸の断面観察によれば、さらにその下には砂礫層が厚く堆積している。すべての遺構の検出は黄褐色土上面で行った。検出した主な遺構には、古墳時代の流路、藤原宮期の掘立柱塀・素掘溝、中世の掘立柱建物・井戸・溝がある。

古墳時代の遺構

調査区南東隅から北端中央に向かって流れる流路SD8702である。幅は4m。上層遺構保護のため完掘はしなかったが、下層堆積土には、布留式の土師器、上層に5世紀から6世紀代の須恵器片が含まれ、藤原京建設以前には埋没していたと考えられる。

藤原宮期の遺構

南北溝SD8700とそれを埋め立てた後に建てられた南北塀SA8701がある。SD8700は北方の第46次調査などで検出した溝SD4301の南延長上にはほぼ位置し、東三坊坊間路東側溝とみられる。溝は幅1.2m、調査区北部での深さ0.7～0.8mで、南ほど浅くなって、北端から約20mで途切れる。埋土に流水の形跡はみられず、暗褐色土で埋め立てている。埋土には藤原宮期の土器が含まれている。なお、西側溝については本調査区では検出されず、削平

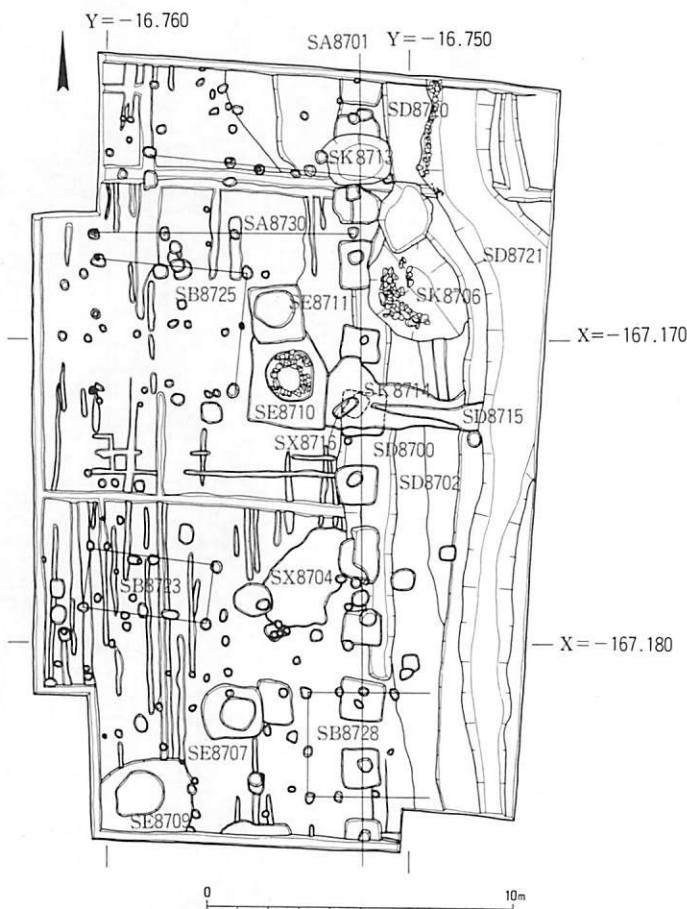


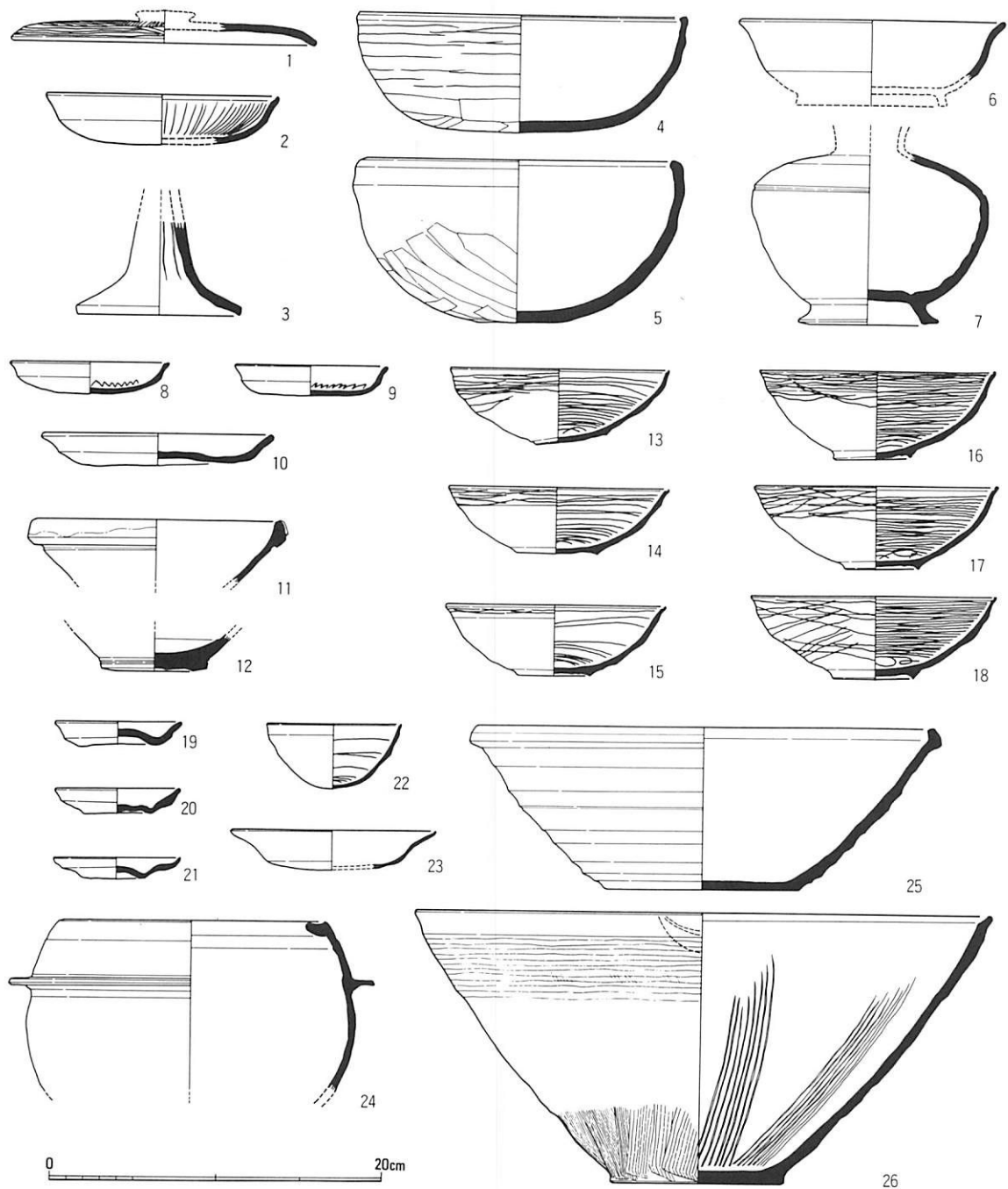
図13 第81-1次調査遺構図 1:250

されたとみられる。

南北塀SA8701は、11間分を検出した。柱掘形は一辺1.2～1.5m。いずれにも柱抜取穴か柱痕跡がある。柱間は約2.4m(8尺)で、深さは北端で0.3～0.4m。SD8700同様、南で浅く、南端では約0.1mしかない。柱抜取穴には藤原宮期の土器が少量含まれていた。

SA8701はSD8700の位置を踏襲して建てられており、遺物の上からも、藤原宮期の中での造替えとみられる。

このことから当調査区周辺の原地形は、香久山西麓の



1・2・5・6・7 SA8701柱穴掘形、3・4 SD8700、8-10・13-15 SK8706上層、11・12・16-18同下層 19・22-25 SD8720、20・21・26 SD8721

図14 第81-1次調査出土土器 1:4

尾根に派生する南から北に下る緩やかな傾斜地であって、藤原京の造営に際しても平坦に造成されることなく、溝や堀が設けられたことをうかがわせる。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構

SK8706は最大幅4.5m、深さ0.9mの不整形な土坑である。西壁の中腹部から底部にかけて大石が投棄されていた。埋土は上層と下層に大別される。上層から13世紀前半代の瓦器碗の完形品が大量に出土した。下層では12世紀後半代の瓦器碗が最新である。

SE8707は一辺約2mの隅丸方形の掘形をもつ石組井戸で、深さは0.8mある。石組上部の大半の石は抜き取ら

れ、底部の3段分が残るのみであった。埋土出土遺物から12世紀後半には廃絶していたとみられる。

SE8709は一辺3m以上の掘形をもつ石組井戸である。SE8707と同様、石組の石は大半が抜き取られ、砂礫層上面から積まれた底部の4段を残すのみであった。抜取穴埋土からは、瓦器碗、土師器皿・羽釜、青磁碗片等が出土した。井戸は13世紀末から14世紀前半代に廃絶したであろう。

室町時代の遺構

SD8720・SD8721は、調査区東辺で検出された幅3.0~3.5m、深さ0.8mの南北溝。両溝とも調査区の北で

緩やかに西へ屈曲し、蛇行する。SD8721は屈曲部から北の西壁部を人頭大の石や瓦で護岸し、SD8720の東岸を壊していることから、15世紀中頃に溝を掘り直したことが明らかである。西壁護岸部の南で土師器小皿が肩に沿って一括投棄されていることもこれを裏づける。SD8720は浅く不整形な土坑SK8714より新しく掘られた溝で、その西の石組井戸SE8710もSK8714より新しい。井戸SE8710の廃絶は遺物からみると15世紀中頃以降のことである。井戸SE8710の北の井戸SE8711はSE8710の掘形の一部を壊して造られている。SE8711は深さ2.0m。石はすべて抜き取られている。遺物からみた時期には大差がない。

3 遺物

土器、瓦埴類、石製品が出土した。

土器 整理箱にして10箱程度で、その7割は中世に属し、藤原宮期に属するものは少ない。

藤原宮期のSD8700・SA8701出土の土器はその大部分が細片である。土師器は、杯A、杯B蓋(1)、杯G、皿A、高杯(3)、鉢類(4・5)があり、鉢類の残りが良いのに対して、甕類などの煮沸形態の量が少ないことが特徴的である。須恵器は、杯B、平瓶、横瓶、台付長頸壺(7)、甕類がある。須恵器杯F(6)は、上部が外に開いてS字状に屈曲し、口縁を丸くおさめ、下半部にケズリをほどこすことや、胎土が緻密で、灰白色を呈するという特色をそなえることから佐波理鉢の模倣形態である可能性が高い。

SK8706からは、多量の瓦器皿(8・9)、椀(13~18)と少量の土師器皿(10)、土師器羽釜、白磁椀(11・12)が出土した。SD8720からは土師器皿(19・23)、土師器羽釜(24)、瓦器椀(22)、東播系須恵器播鉢(25)、青磁椀や白磁椀が出土した。SD8721には土師器小皿が一括投棄されており、器壁の厚いもの(20)と薄いもの(21)に大別できる。ほかに土師器羽釜、瓦質土器の播鉢(26)、火鉢、深鉢、青磁椀などが出土し、すべて小片ではあるが、豊富な器種構成をもっている。

瓦埴類 丸瓦36点、6.7kg、平瓦126点、21.2kg、埴1点出土し、いずれも第47次、第50次調査(『藤原概報17』)で報告されたものと同型式である。

石製品 中世土坑SK8713から出土した石帯がある。奈良時代末から平安時代初頭の型式に属する。



図15 南北堀SA8701(南から)

4 まとめ

藤原宮期の南北溝SD8700は、北の左京六条三坊での成果に対比すると、東三坊坊間路の東側溝とみてよいだろう。西側溝は削平のため遺存していなかったが、推定路面上には、SD8700に重複して南北堀SA8701がある。藤原京条坊が藤原宮期に廃止される状況は六条三坊でも確認されているが、七条三坊でも当初は西北坪と東北坪が坊間路で分離されていたが、後にこの二つの坪を一体に利用し、南北区画堀を設けたことが判明した。

つぎに、中世の南北溝SD8720とそれを改修したSD8721にかんしては、調査地周辺の水田の段差や畦畔に、この溝と南北に連続しているものがみられ、平面的にそれらをたどると現在の木之本の集落を囲む。環濠の遺存地割であろう。とすれば、SD8720・SD8721は中世環濠集落の東を画する溝である可能性が高い。

以上のように本調査区では、藤原宮期と中世環濠との2つの時期の区画施設の存在を明らかにしたが、香久山、中ノ川を東にひかえる環境で、それらがどのように機能したかは興味深い課題である。今後の調査で、周辺施設との関連や当地区の土地利用の変遷が追究されていくことを期待したい。(羽鳥幸一)